

大隅国建部氏系図考証(1)

日隈正守

The study on Takebe's family tree in Osumi province (1)

Masamori HINOKUMA

はじめに

建部氏は、平安後期以降大隅国杵寝院南俣を領有した在地領主である。建部氏については、大隅国内における有力な領主である事、多くの文書が相伝されている事等により⁽¹⁾、領主制の面を中心に一定の研究が蓄積されてきた⁽²⁾。建部氏については、府領領主として大宰府、一宮半不輪領領主として国衙・一宮（大隅正八幡宮）との関係を踏まえて分析する必要があるし、領主支配の面では非農業生産物収取や水上交易も含めた形で考察していかなければならない⁽³⁾。さて建部氏を研究する上での問題点の一つは、平安期から鎌倉初期における建部氏に関して、信頼し得る系図がない事である。建部氏の系図としては、杵寝氏系統では「平氏禰寝家系図」⁽⁴⁾、佐多氏系統では「小松家系図」があるが⁽⁵⁾、各々文書と比較検討する必要がある。故に本稿では建部氏研究の基礎作業として、文書から建部氏系図を復元し、考察を加える事にする。私は以前建部氏の一系統である佐多氏の系図を文書から復元して検討した際、平安後期の建部氏系図を復現する作業をした事がある⁽⁶⁾。従って本稿は、前稿と一部重複する所がある。しかし今回は重複の煩を厭わず、平安後期から鎌倉初期における建部氏の系図を復元し、考察していく。

一、建部氏系図の復元

本章では、平安後期から鎌倉初期における建部氏系図を文書から復現していく。

建部氏に関する最古の文書は、保安二年正月十日付権大掾建部親助解状である⁽⁷⁾。本解状には、「権大掾建部親助解 申請 国裁事、(中略) 右、謹検案内、件南俣先祖相傳之所領也、而父頼親宿祢、以去天永三年四月十八日死去之後、親助為嫡男、請繼令領掌之間、(中略) 沽渡於伯父掾頼清畢、」と記載されている。この記載から、建部氏の姓は宿祢である事、建部親助は保安二年(1121)正月十日の時点で権大掾である事、親助は頼親の嫡男である事、親助は先祖相傳の所領である杵寝院南俣を父頼親から天永三年(1112)に継承した事、その後親助は杵寝院南俣を伯父頼清に沽却した事、親助の伯父頼清は保安二年の時点で掾である事が解る。親助の権大掾職については、久安三年七月十五日付前掾建部親助解状の「前掾建部宿祢親助」の記載から⁽⁸⁾、久安三年(1147)七月十

五日以前に権大掾職を退任している事が解る。

頼清の掾職については、保安二年十月十一日付大隅国司庁宣に「権大掾建部頼清」と記載されている事から⁽⁹⁾、権大掾職である事が解る。建部親助・頼清の権大掾職は、建部氏が大隅国内の領主であり、大隅国衙との関係を示す文書に記載されている事から判断すると、大隅国衙の所職であると考えられる。

建部親助・頼清と、大隅国一宮である大隅正八幡宮との関係については、保安二年六月十一日付大隅正八幡宮政所下文が拠となる⁽¹⁰⁾。本下文に「貫首親助」、「伯父御馬所検校頼清」という記載がある。この事から、親助・頼清は大隅正八幡宮の貫首・御馬所検校である事が解る⁽¹¹⁾。親助・頼清は、国衙の在庁官人であるとともに一宮の神官を兼任していた。また政所下文が発給されている事から、保安二年の時点で祢寝院南俣は大隅正八幡宮の宮領化している事が窺える。

親助には、妹がいた。前述保安二年正月十日付権大掾建部親助解状に、「権大掾建部親助解 申請 国裁事、言上薩摩国住人平行道、依為妹夫、祢寝院南俣令譲渡由無実子細状、」と記載されていて、親助の妹の夫が薩摩国の在地領主平行道である事が解る。親助の妹については、前述久安三年七月十五日付前掾建部宿祢親助解状の事書に、「前掾建部宿祢親助謹言、言上、祢寝院司清貞訴申、為薩摩国所部頼娃郡住人忠家等、号母領、以去六月卅日令押入事、」事実書の中に「(前略) 雖頼親之娘、不預處分、何況号其子、忠家等之妨非道也」という記載があり、親助の妹と平行道との間の子が忠家であると考えられる。忠家は薩摩国頼娃郡住人であるので、忠家の父行道の本拠地も頼娃郡であったと想定される⁽¹²⁾。

親助の子と推定されるのは、親清である。親清については、建部清忠解状断簡に記載があり⁽¹³⁾、十二世紀後期の内乱期に一族の建部清房と共に平氏側として行動した形跡がある。親清の子孫が建部姓佐多氏である⁽¹⁴⁾。

頼清の所領としては、甥親助から買得した祢寝院南俣の他に、天養二年四月廿日付前掾建部頼高置文に記された「小川院殿園、東園」がある⁽¹⁵⁾。

頼清の子については、前述建部清忠解状断簡の「頼清（頼清の父）」の記載から、頼清の子が清貞である事が解る。頼清と清貞との関係及び清貞の兄弟については、前述天養二年四月廿日付前掾建部頼高置文の事実書の「右、父寂禅存生時於祢寝院頼源園、限四至雖与頼高、小川院殿園、東園適子清貞所分也、雖末兄弟互和融、件祢寝院頼源園所分文適子清貞所渡也、仍小川院東園頼高可所領状如件、」という記載が参考になる。この記載から、清貞の兄弟が頼高である事、清貞・頼高兄弟の父頼清の法名が寂禅である事、清貞が頼清の嫡子である事、頼清から嫡子清貞へ小川院殿園、東園が、頼高へ祢寝院頼源園が譲与された事、天養二年（1145）四月廿日に清貞と頼高との間で小川院東園と祢寝院頼源園とが相博された事が解る。

清貞は、天養二年三月十二日付前掾建部清貞処分状の事書部分に「前掾建部清貞」と記載されていて⁽¹⁶⁾、天養二年（1145）三月十二日以前の時点で建部清貞は掾職を辞任している事が確認される。清貞の掾職在任時期についての史料として、天承二年四月廿五日付大隅国司解がある⁽¹⁷⁾。本解に、

「正六位上行大掾達部清貞」が署判している。建部氏の起源が宮城の東中門である建部（達部）門を警備した負名の氏であると考えれば⁽¹⁸⁾，建部と達部とは同じであり，達部清貞は建部清貞と同一人物と考えて差支えないと考えられる。故に建部清貞の掾職は大掾職である事，清貞の大掾職在任時期は天養二年前後である事，清貞が正六位上の位を有している事が明らかとなった。天承元年九月十七日付八幡正宮執印僧行賢寄進状写⁽¹⁹⁾の国衙関係署判者の中の「権大掾建部」は，清貞である可能性が強いと思う。また清貞は，承元四年五月 日付大隅国在庁官人解状の事実書の中に「故税所清貞」と記載されている⁽²⁰⁾。この記載から，清貞が国衙の税所職に補任されている事が解る。清貞が税所職に補任されていた時期は不詳であるが，長承四年以前ではないかと推定される⁽²¹⁾。また前述久安三年七月十五日付前掾建部宿祢親助解状の事書の「祢寝院司清貞」の記載から，清貞が祢寝院司である事が解る。ここに記載されている祢寝院司は，祢寝院南俣と同院北俣とを併せて領有する官職であると考えられる⁽²²⁾。

清貞の所領として，前述天養二年三月十二日付前掾建部清貞処分状に記載された「祢寝南俣内，作志木，志天利，」と「桑西郷内皆尾村」がある。また久安四年五月九日付前掾建部清貞讓状に記載された「桑東郷内永谷村」⁽²³⁾，前述承元四年五月 日付大隅国在庁官人解状の事実書に記載された「(桑) 東郷武安名」⁽²⁴⁾，「祢寝南俣内山本村」がある。更に天養二年四月廿日付前掾建部頼高置文によれば，前述の通り清貞は父頼清から小川院殿園，東園を譲与され，天養二年四月二十日に清貞と弟頼高との間で小川院東園と祢寝院頼源園とが相博されている。史料上確認される清貞の所領を院郷別に整理すると，祢寝院南俣内の作志木・志天利・山本村，祢寝院内頼源園⁽²⁵⁾，桑西郷皆尾村，桑東郷永谷村・武安名，小川院殿園・東園となる。建部氏の所領が祢寝院南俣以外に拡大している事は注目される。

清貞の妻については，前述久安四年五月九日付前掾建部清貞解状の「財田得富謹言，讓渡進田畠地壺處事，在桑東郷内永谷村者，於四至者，在本公驗，右件田畠地，限永年，干檜前太子所讓渡如件，乍云夫妻，内々有恩之故，彼田畠地永所讓渡如件」の記載が参考になる。この記載から，清貞の妻が檜前太子（長女）である事，清貞が妻に桑東郷永谷村を譲与している事が解る。檜前太子については，「税所氏系図」では該当者が見当たらないが⁽²⁶⁾，世代的には篤房の父篤近の姉妹に当ると考えられる。

清貞の諸子について，次に考察する。前述建部清忠解状断簡に，「清貞清忠曾」，「清房清忠曾」と記載されている。この記載から，清貞は清忠の曾祖父，清房は清忠の祖父である事が解る。この曾祖父・祖父が清忠の父方の血縁関係を示しているならば，清貞と清房とは父子関係になる。同解状断簡中の「頼親字有頼」，「頼清貞父」という記載を見ると，頼親が清貞の「伯父」，頼清が近（親）助の「伯父」と呼ばれている。頼親が清貞の父方の伯父であり，頼清が近（親）助の父方の伯父である事は，本章の今までの建部氏の一族関係から明らかである。故に本解状断簡において，「伯父」という用例は父方の伯父に対して使用されている事が解る。この事を踏まえると，本解状断簡中の「曾祖父」・「祖父」の用例は父方の血縁関係を示していると想定され，清忠の「曾祖父」である清貞と清忠の

「祖父」である清房との間に父子関係が成り立つと考えられる。故に清貞の子として清房の存在が確認されると思う⁽²⁷⁾。

清房については、前述建部清忠解状断簡に「在廳清房」と記載され、在庁官人であった事が解る。国衙において補任されている具体的官職名は詳らかではないが、父清貞が(権)大掾職、税所職であった事、清貞から清房に至る時期に建部氏の国衙における勢力後退の可能性を示す史料は現段階において見出せない事等を併せ考えると、清房の「在庁」の具体的な官職は権大掾職や税所職である可能性が強いと考えられる。清房の所領については、本解状断簡から祢寝院南俣を領有していた事が想定されるが、姻族の藤原氏と所領争いをしている。

清房の兄弟に関する史料として、前述承元四年五月 日付大隅国在庁官人解状がある。同解の事実書の一節に「親父故清貞存生之時、子息男女并妻女処分之内、東郷武安名心妙得分也、又清貞妻女得分永谷村許也、爰尼西念得分祢寝南俣内山本村名田也、」と記載されている。この記載から、清貞の女として心妙と西念がいた事、清貞は、所領配分時に、妻に永谷村、心妙に(桑)東郷武安名、西念に祢寝院南俣内山本村を譲与した事が解る。本解の事実書の冒頭部分の「請被殊任尼心妙解状旨、為同妹尼西念、不帶指証文、成非論由子細状、」の記載から、心妙が姉で西念が妹である事が解る。

まず姉の心妙について考察していく。前記の様に心妙は、父清貞から桑東郷武安名を譲与された。前述承元四年五月 日付大隅国在庁官人解状の事実書の一節に「件注文内、古川田并次上判官代田、彼母堂所領由注申条謀略也、親父故税所清貞存生時、心妙得分譲状明白也、」という記載がある。この記載から、古川田・次上判官代田は父清貞から心妙に譲与された所領である事が判明する。文永十一年九月 日付佐汰宗親跡所領注文案によれば⁽²⁸⁾、次上判官代田は詳らかではないが、古川田は桑東郷武安名田地の記載の中に「古河田伍段」があり、古川田は「古河田伍段」に該当すると考えられる。心妙が清貞から武安名を譲与された事と、承元四年(1210)に心妙が武安名内の古川田の領有権を相論で主張している事、本解状によれば、心妙は古川田以外の武安名を領有している可能性が想定される事より、心妙は承元四年の時点において武安名を領有していたと考えられる。

武安名は、大隅国建久岡田帳にも記載されている⁽²⁹⁾。関係文を示す。

「桑東郷百八十九丁四段大

(中略)

国領

公田十五丁五段丁別廿疋

武安六丁

宗新大夫建部高清所知」

(字カ)

岡田帳では、武安名主として建部高清の名が記載されている。しかし前述の様に武安名は、当該期心妙が領有していたと考えられる。心妙と建部高清との関係をどのように考えるべきであろうか。ここで想起されるのは、在地領主の場合も、夫が妻の財産を領有する夫婦同財の原理が機能する場

合があるという先学の指摘である⁽³⁰⁾。夫婦同財の原理がこの場合機能していたと考えれば、心妙の所領である武安名を、建部高清は夫として領有していたと考える事ができる。現時点では、建部高清は心妙の夫であると考えておきたい。

心妙の所領としては、他に母檜前太子の遺領である桑東郷内永谷村がある。前記承元四年五月日付大隅国在庁官人解状の中に、永谷村について「心妙者、自母堂存生之時、請狀領掌地也、」と記載されている。この承元四年（1210）は、同解によると「経彼母死去三十余年後、」にあたり、この時点で心妙が永谷村を三十年以上領有していた事が解る。

次に妹の西念について考察していく。前記の様に西念は、父清貞から祢寝院南俣内山本村を譲与されている。西念については、前記承元四年五月日付大隅国在庁官人解状の事実書の一節に「乍為女身、以夫高平被南俣押領之事、遠近普通無隠事也、」と記載により、夫が高平である事、高平の祢寝院南俣の領有権を巡る相論の契機は西念にある事が解る。この高平は、前述建部清忠解状断簡の中では「藤原高平」と記載されている。藤原高平は、菱刈郡を根拠地とする荘官系在地領主で、系譜的には後の菱刈氏とも血縁関係にある⁽³¹⁾。

清貞の他の諸子については、前述建部清忠解状断簡に「高平光基妹夫也
清貴妻云々」，「高平光忠妹夫
能之父舅」（重力）の記載がある。この記載から、高平妻の西念の上に兄弟（乃至は姉妹）がいる事が解る。光基・光忠は法名と想定され、両者が男子か女子か、又は同一人物か他人か、光基・光忠と清房との関係はどうなのか等は詳らかではない。現段階では、光基・光忠に関する史料は他にないので、取りあえず光基・光忠は心妙と西念との間に配置しておく。

清房の子に関しては、前記建部清忠解状断簡の「清房清重」の記載と、建保二年六月十五日付正八幡宮神官所司等解状⁽³²⁾の「清忠親父清重入道」の記載とが参考になる。両方の記載を照合すると、清忠の祖父が清房、清忠の父が清重になる。前記の様に建部清忠解状断簡の「祖父」は、父方の祖父と考えてよいと想定されるので、清房と清重との間に父子関係が成り立つと判断される。故に清房の子は、清重であると考えられる。

清重については、建久図田帳の祢寝院南俣の記載が参考になる。関係部分を示す。

「祢寝南俣四十丁

正宮領 本家八幡 地頭掃部頭

郡本三十丁丁別廿疋 元建部清重所知

賜大將殿御下文菱刈六郎重俊知行之、但去文治五年以後、号府別府、以多丁弁四

百疋之外、不弁社家年貢、不随国務、任自由、知行之、」

図田帳の記載から、祢寝院南俣郡本は、建部清重が一旦領有していたが、菱刈重俊が大將殿（源頼朝）の下文を賜い知行している事が解る。菱刈重俊が祢寝院南俣郡本を領有した時期は、図田帳の記載からは文治五年（1189）以前である事が解る。前述建部清忠解状断簡の中には、藤原重弘・重信に対して祢寝院南俣の領有を認めた元暦二年五月日付鎮西守護人千葉介（千葉常胤）外題や同年六月五日付大宰府下文が含まれている。菱刈重俊と藤原重弘・重信との関係は今後検討すべき

であるが⁽³³⁾、建部清重が祢寝院南俣の領有権を鎌倉幕府から没収されたのは元暦二年(1185)であると考えられる。

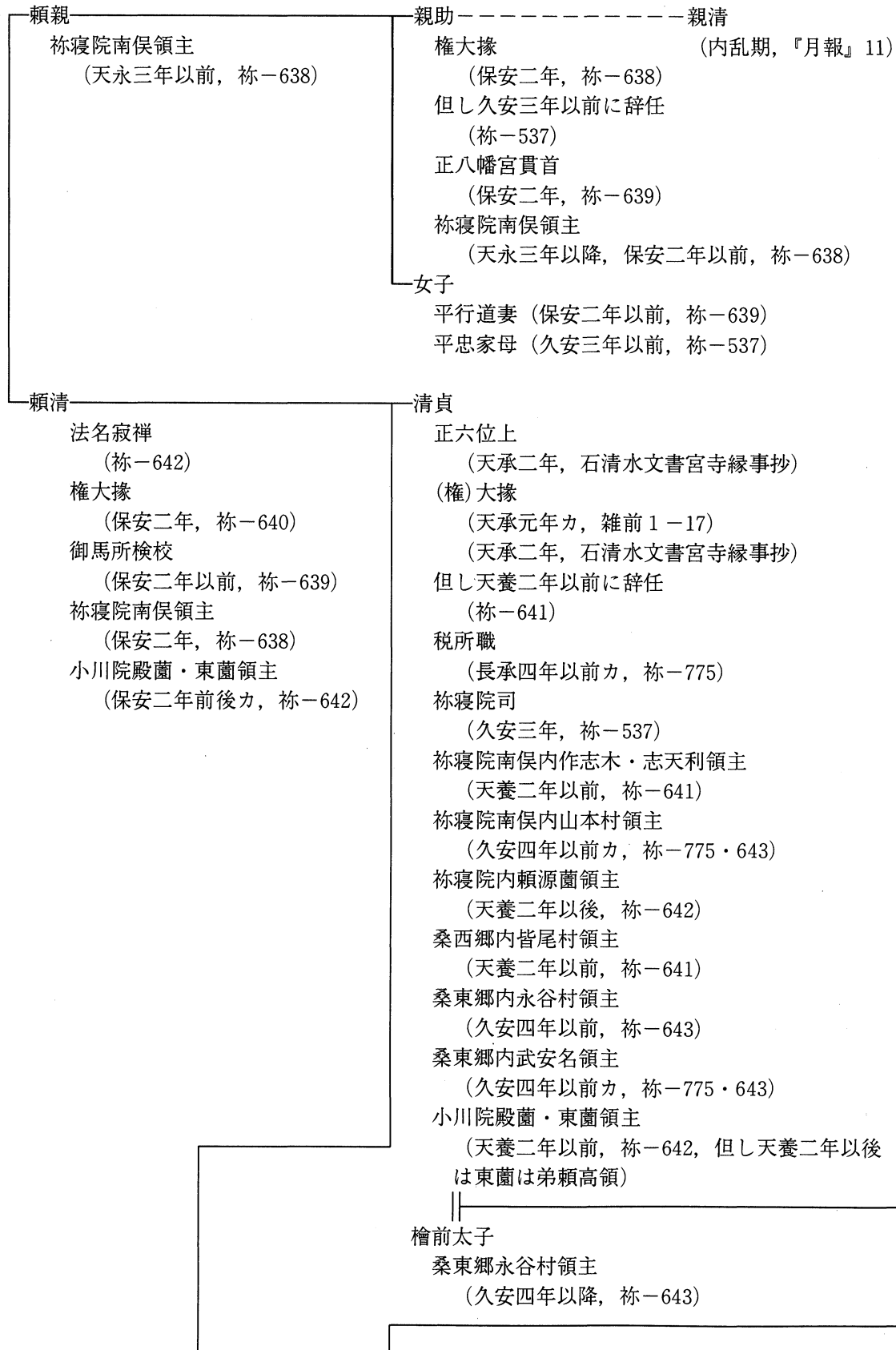
清重は、祢寝院南俣の領有権を回復するために、大隅国一宮である正八幡宮の支援を受け幕府に提訴した。そして相論が継続する中で、建部清重が祢寝院南俣の領有権を回復した時期は、現段階においては一応建仁三年(1203)と考えておく事にする⁽³⁴⁾。なお清重の法名は、建仁三年八月日付大隅国司庁宣⁽³⁵⁾等の文書から行西である事が判明する。

清貞の子孫について、清貞の孫清重の代迄考察した。次には清貞の弟頼高について、検討する。頼高に関する史料としては、前述天養二年四月廿日付前掾建部頼高置文がある。本置文の中の「前掾建部頼高」の記載から、頼高は天養二年以前に掾職に補任され辞任していた事が解る。頼高の所領に関しては、本置文の前記引用部分に、頼清から頼高に祢寝院内頼源藺が譲与された事、天養二年(1145)四月廿日に頼高は兄清貞に祢寝院内頼源藺を渡し、その代替に清貞から小川院東藺を譲渡された事が記載されている。故に頼高は、天養二年以前は祢寝院内頼源藺を、天養二年以後は小川院東藺を領有していたのである。頼高の他の所領は不詳である。

頼高の子は、史料的には不詳である。しかし尼心妙の夫と想定され、図田帳によれば桑東郷武安名主及び祢寝院南俣内佐汰十丁の領主であり通称が新大夫である建部高清は、頼高と「高」の字を共有している。従来高清は親清と同一人物であると考えられてきたが、その根拠は無く、名前の構造で見れば、むしろ高清は頼高の子息であると推定される⁽³⁶⁾。

以上平安後期から鎌倉初期に至るまで、「祢寝文書」を中心に祢寝関係文書を使用し、建部一族の人物関係・官職・所領について考察してみた。今まで考察した結果を系図化したものが以下に掲げる建部氏系図である。各々人名の下に、官職や所領、姻戚関係等を該当時期と根拠となる史料を略号で示した。なお父子関係が確定または確定に近い推定部分は実線、推定の域を出ない部分は破線で示した。

建部氏系図



—清房—

在庁

(内乱期, 『月報』 11)

祢寝院南俣領主

(内乱期, 『月報』 11)

—心妙—

建部高清妻力

(図田帳, 祢—775)

桑東郷武安名名主

(久安四年以降力, 祢—643・775)

(承元四年, 祢—775・643)

桑東郷永谷村領主

(治承元年頃以降力, 祢—775)

—光基 (内乱期 『月報』 11)

—光忠 (内乱期 『月報』 11)

—西念—

藤原高平妻

(祢—775, 『月報』 11)

祢寝院南俣内山本村領主

(久安四年以降力, 祢—643・775)

—清重—

法名行西 (祢—3等)

祢寝院南俣領主

(元暦二年以前, 『月報』 11, 図田帳)

(建仁三年以後, 祢—3・280・4・268)

—賴高—

前掾

(天養二年以前, 祢—642)

祢寝院内賴源藺領主

(天養二年以前, 祢—642)

小川院東藺

(天養二年以後, 祢—642)

——— 高清

新大夫

(建久八年, 図田帳)

祢寝院南俣内佐汰領主

(建久八年, 図田帳)

桑東郷武安名名主

(建久八年, 図田帳)

二、建部氏系図の分析

前章では、「禰寝文書」を中心に関係文書から建部氏系図を作成した。本章では、建部氏系図を見ながら内容を分析していく。

まず最初に、建部氏系図の名前について考察する。十一世紀末の段階では、頼親・頼清兄弟の名乗から窺えるように、兄弟間で「頼」を通字としている。しかし十二世紀になると、頼親・親助父子の「親」、頼清・清貞父子の「清」等の様に父子の間で通字が使用される様になる。通字が兄弟間から世代間で使用される様になる事は、当時の一般的傾向であるが⁽³⁷⁾、建部氏の場合も通字の使用される範囲が兄弟間から世代間へと移行している事が確認される。法名については、頼清が寂禪、清重が行西、清貞の女が心妙・西念、性別は不詳であるが清貞の子が光基・光忠である。建部氏一族で法名が判明する事例は少ないので断定はできないが、法名に関しては一族間で共通の系字を用いていたとはいえない。但し清貞の子の光基と光忠とが別人であれば、建部氏一族において法名に共通の系字を用いる萌芽と見る事もできる。建部氏一族における法名命名法については、鎌倉前期以降の建部一族の事例を検討する必要がある。

次に官職・所領について考察する。建部氏系図において、補任された官職が判明するのは親助以降である。親助は、権大掾職に補任され国衙機構の構成員になると共に、一宮の神官職（貫首職）も兼任している。また頼清も国衙の在庁職（権大掾職）と一宮の神官職（御馬所檢校職）とを兼任している。頼清の子清貞以降は、建部氏は一宮の宮領領主としての地位は保持するものの、一宮の神官職は兼帯していないのである。

建部氏が、親助・頼清の時期にのみ一宮の神官職を兼帯している事実は注目される。親助・頼清の時期に、建部氏の側に、一宮の存在を特に必要とする要因があったと想定せざるを得ない。親助期の建部氏は、祢寝院南俣支配が行き詰まり、大宰府・国衙への年貢収納も滞る状態であった⁽³⁸⁾。頼清期の建部氏は、親助の妹の夫である平行道と祢寝院南俣の領有権を巡り相論をしていた⁽³⁹⁾。故に親助・頼清期の建部氏は、領主支配が動揺していた時期であった。建部氏は、領主支配の行き詰まりを克服するために、国衙だけでなく一宮とも結びついたのではないかと現段階においては推測しておく事にしたい。

建部氏は、清貞の時期に所領を拡大する。史料上確認される建部氏の所領は清貞の時期に増加する。それも国衙所在地である桑東郷や一宮鎮座地である桑西郷等、祢寝院南俣以外の国衙近郷に所領を獲得している。この事は、清貞が国衙において国内支配の要である税所職に補任された事によるものであると考えられる。また清貞は祢寝院司に補任された事により、祢寝院内における支配体制の確立を意図したと考えられる。この時期に祢寝院北俣が島津荘の寄郡化する事も⁽⁴⁰⁾、清貞の祢寝院司補任と密接な関わりがあると考えられる。建部清房期における建部氏の所職は「在庁」職として表現され、具体的な職名は不詳である。しかし恐らくは、清房は清貞の所職を継承したもの

と推測される。建部氏は、内乱期まで(権)大掾職や税所職等国衙の重要な職を保持し国衙の実権を掌握していたのではないかと推定される。そして内乱期に、建部氏は所領・所職を鎌倉幕府から没収されて没落したのである。所領・所職を没収された建部氏は、一宮の神官・所司の支援を得て幕府に提訴し、鎌倉前期の建仁三年に所領を回復したと考えられる。建部氏の官職・所領の獲得過程は、大隅国内における荘園・公領制の形成過程と緊密な関係があると想定されるし、内乱期に没落した建部氏が一宮の支援により旧領を回復して得た事実は、一宮制の国内領主に対して有す歴史的意義・役割を解明する上での重要な鍵になると考えられる。勿論大隅国内の歴史的動向は、大隅一国で完結するものではなく、隣接する国々や大宰府・中央の動向とも緊密な関係を有しているのである。今後建部氏の領主支配の変遷過程を素材として、中央や隣国の動向も踏まえつつ、大隅国における荘園・公領制や一宮制の研究を深化させて行きたい。

建部氏の婚姻関係については、史料制約のため僅か四例が知り得るだけである。この内三例は、建部氏の女子が嫁いだ事例、残りの一例は、他氏の女子が建部氏に嫁いだ事例である。最初に建部氏の女子が嫁いだ事例から見ていく。一つは、建部頼親の女子が府官系薩摩平氏と想定される平行道の妻となった事例である。婚姻の契機は、平氏も建部氏も府官系領主である事によると思われるが、同時に薩摩平氏と建部氏とが鹿児島湾を通じて関係を有していた可能性を考慮する必要があるのではないと思う。残りの二例は、何れも建部清貞の女子の事例である。一つは、清貞の女子心妙が、清貞の弟頼高の子と推測される高清の妻になったと想定される事である。もしこの推測が成り立つとすれば、当該期同族(従兄)に嫁いだ唯一の例となる。もう一つは、清貞の女子西念が藤原高平に嫁いだ事例である。藤原氏は、先述の様に島津荘官系の領主である。他氏の女子が建部氏に嫁いだ例として、檜前太子が清貞の妻となった例がある。以上僅か四例ではあるが、建部氏の婚姻範囲は以外と広範囲に及んでいる。建部一族同士や国衙領領主檜前氏との婚姻もあれば、島津荘の荘官系領主藤原氏や隣国薩摩国額娃郡の府官系薩摩平氏との婚姻もある。各々の婚姻時期をもう少し厳密に確定し、当該期の政治情勢と関連づければ様々な事が解ってくると思う。この点についても、今後検討を加えていきたい。

最後に、本稿で作成した建部氏系図と「平氏祢寝家系図」及び「小松家系図」とを比較しておく。本稿において文書より作成した建部氏系図は、頼親・頼清兄弟から始まり、頼清の曾孫清重に至るものである。しかし「平氏祢寝家系図」・「小松家系図」の何れも、桓武天皇から始まる平氏系図である。そして建部姓祢寝氏の祖である清重は、平清盛の玄孫で、清盛から清重に至る系図は、平清盛―重盛―維盛―高清―清重となっている。言うまでもなくこの系図は歴史的事実ではなく、建部氏が平姓を冒した結果である。江戸中期、祢寝氏が文書を整理し平氏末裔の系図を作成した時に、清重より前の文書は「治建文献」として別に成巻された経緯がある⁽⁴¹⁾。故に現存する建部氏関係系図は、何れも平氏末裔として作成されているのである。従って現存の建部氏関係系図と本稿の系図とは、全く一致しないのである。

以上本章では、前章で作成した建部氏系図について、名前、官職・所領、婚姻関係、現存の建部

氏関係系図との比較等の面から考察した。その結果、名前については俗名における通字使用が、兄弟間から世代間に変化している事、法名については、今後の検討を必要とする事、建部氏の官職・所領の変遷は、建部氏が当該期におかれた状態や大隅国内における歴史的動向と密接に関係している事、建部氏の婚姻範囲は、比較的広範囲である事、本稿で作成した建部氏系図と現存の建部氏関係系図とは、内容的に全く一致しない事を指摘した。

おわりに

建部氏を素材として、大隅国における荘園・公領制や一宮制の研究を行なう上での基礎作業として、「禰寝文書」を中心に関係文書から建部氏の系図を作成してみた。当初は鎌倉末期に至る時期迄の分を作成する予定であったが、今回は種々の事情で鎌倉初期で筆を置かざるを得なかった。鎌倉初期以降の建部氏系図の作成は、今後の課題としたい。ただ今回、建部氏系図の平安後期部分を作成する過程で、今後検討すべき問題が様々と出てきた。これらの諸問題を念頭に置きながら、大隅国における荘園・公領制研究、一宮制研究を進めていきたい。

(付記)

本稿を作成する上で、史料閲覧に関して、鹿児島県歴史資料センター黎明館、鹿児島市西伊敷在住坂口久子氏、に多大にお世話になった。記して謝意を表したい。また、本稿は、平成7年度科学研究費補助金奨励研究（A）の成果の一部である。

- (1) 建部氏に相伝された文書及び同氏関係文書は、川添昭二編『禰寝文書』(1)～(3) (九州史料刊行会 昭和33～34年)、鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺家わけ』(1) (鹿児島県 昭和63年) 所収「禰寝文書」として刊行されている。本稿では、便宜的に後者を使用する。
- (2) 平安後期・鎌倉期における建部氏関係の研究の主なものとしては、水上一久「中世讓状に現れたる所従について―大隅国禰寝氏の場合―」(『史学雑誌』64-7 昭和30年 後に同『中世の荘園と社会』吉川弘文館 昭和44年に再録)、馬越脇千津子「中世における辺境土豪の動向―大隅国禰寝氏について―」(『史窓』19 昭和35年)、正木喜三郎「府領形成の一考察」(『西日本史学』18 昭和41年)、同「府領考」(竹内理三編『九州史研究』御茶の水書房 昭和43年)、両論文は後に同『大宰府領の研究』(文献出版 平成3年)に再録、義江彰夫「在地領主における所領所有とその歴史的 성격―11世紀半より13世紀末にいたる―」(『歴史学研究』343 昭和43年)、小園公雄「大隅国禰寝氏の惣領制について」(『鹿児島県立鹿児島中央高等学校研究紀要』4 昭和44年)、同「大隅国御家人佐多氏の支配関係について」(『日本歴史』267 昭和45年)、鈴木勝也「中世在地領主制の構造と展開―大隅国禰寝氏を中心に―」(『皇学館論叢』16-5 昭和58年)、工藤勝彦「鎌倉幕府初期の訴訟制度に関する考察」(2) (『史叢』38 昭和62年) 等がある。
- (3) 義江彰夫氏は「在地領主における所領所有とその歴史的 성격―11世紀半より13世紀末にいたる―」において、建部氏の禰寝院南俣の田畠支配の実態を現地調査も踏まえて明らかにしている。但し建部氏の非農業生産物の収取については、史料不足により言及されていない。しかしこの点については、僅かな史料からであっても、今後検討していく必要がある。
- (4) 『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺家わけ』(1)所収。
- (5) 鹿児島市西伊敷在住坂口久子氏所蔵。
- (6) 「建部姓佐多氏系譜再考」(『鹿児島中世史研究会報』51. 平成8年)。

- (7) 『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺家わけ』(1)所収「禰寝文書」史料番号638, 以下称-638と略記する。なお「禰寝文書」所収文書中最古の治暦五年正月廿九日付藤原頼光所領配分帳案(称-637)に記載されている藤原氏と建部氏とが別の氏族である事は, 拙稿「国内領主と一宮制との関係ー建部氏と大隅国衛・正八幡宮との関係ー」(『鹿児島大学社会科教育学会研究年報』1.平成7年)を参照。
- (8) 称-537
- (9) 称-640
- (10) 称-639
- (11) 本政所下文では, 親助に貫首, 頼清に御馬所検校の職を冠して記載している。正八幡宮に御馬所検校職が存在する事は, 「禰寝文書」所収の他の文書(称-645・644等)からも確認される。貫首が宇佐八幡宮等の神官職として存在する事実を踏まえると, 親助の貫首職は正八幡宮の神官職であると考えられる。なお「貫首」は, 『禰寝文書』(1)・「禰寝文書」の何れも「貫主」となっている。しかし影写本「禰寝文書」(6)(東京大学史料編纂所蔵)の写真版(鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵)により訂正した。史料閲覧の便宜を計っていただいた鹿児島県歴史資料センター黎明館に対し衷心より御礼申し上げる。
- (12) 江平望氏は平行道・忠家父子を薩摩平氏の平良道・忠永父子に擬している(『指宿市誌』指宿市 昭和60年)。この説については, 今後検討したい。
- (13) 『旧記雑録』月報11(鹿児島県 平成元年), なお建部清忠解状断簡については, 江平望「禰寝文書建部清忠解状について」(『鹿児島中世史研究会報』35 昭和50年)を参照。本論文は, 後に同『鹿児島県中世史料考証』(鹿児島中世史研究会 昭和51年)に再録。
- (14) 小園公雄「大隅国禰寝氏の惣領制について」, 同「大隅国御家人佐多氏の支配関係について」, 拙稿「建部姓佐多氏系譜再考」
- (15) 称-642
- (16) 称-641, 本処分状は, 『禰寝文書』・「禰寝文書」の何れも建部頼清処分状と名付けられている。しかし本処分状の花押は, 久安四年五月九日付建部清貞譲状(称-643)における清貞の花押と一致する。故に, 本処分状の文書名も本稿の様に變更されるべきである。
- (17) 東京帝国大学編『大日本古文書』家わけ4 石清水文書の5 宮寺縁事抄12(大正2年)
- (18) 笹山晴生『日本古代衛府制度の研究』(東京大学出版会 昭和60年), P.7~11, P.27~33,
- (19) 鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 旧記雑録前編』(1)(鹿児島県 昭和54年)史料番号17番 以後雑前1-17と略記す。
- (20) 称-775
- (21) 前述天承元年九月十七日付八幡正宮執印僧行賢寄進状写の大介以下国衛関係の署判者中に「税所検校建部在判」とある。この税所検校建部某と同一人物の可能性をもつが, 長承四年六月 日付財田稲富解状(『台明寺文書』)の国衛関係署判者の中の「税所検校建部(花押)」である。この税所検校建部某の花押は, 久安四年五月九日付建部清貞譲状の清貞の花押とは一致しない。故に天承元年から長承四年にかけて税所検校職に在任した建部某は, 建部清貞とは別人である。建部清貞の税所職は税所検校職を指すと考えられるので, 清貞の税所職在任期間は天承元年以前の時期か, 長承四年以降、天養二年以前の時期のいずれかである。確証はないが, 天承二年に清貞が(権)大掾職に在任している事を考えると, 清貞が税所職であった時期は天承元年以前とした方がよいと想定される。なお長承四年六月 日付財田稲富解状の閲覧については, 東京大学史料編纂所のお世話になった。記して謝意を表したい。
- (22) 祢寝院南俣を領有していた建部氏が, 祢寝院北俣をも含む祢寝院全体を領有する祢寝院司に補任された事は, 注目すべき事実である。この事には国衛が関与していると想定されるし, 祢寝院北俣の島津荘寄郡化の事実と考え併せると, 大隅国における荘園公領制の成立過程を解明する鍵になると考えられる。この点については, 今後検討していきたい。
- (23) 称-643
- (24) 本解では, 「東郷武安名」と記載されている。武安名は他の「禰寝文書」所収文書には「桑東郷武安名」と記載されている。故に本解の「東郷武安名」は桑東郷武安名の事と考えられる。
- (25) 頼源菫に関しては, 他に史料が無くはっきりとした事は解らない。祢寝院北俣は藤原氏が領有していた事を踏まえると, 頼源菫は祢寝院南俣内に存在したと想定されるが, 本稿では史料の記載に従い祢寝院内頼源菫として扱う事にする。

- (26) 『諸家系図』(東京大学史料編纂所蔵) 3所収。
- (27) この事については、拙稿「建部姓佐多氏系譜再考」でも考察している。
- (28) 祢-538
- (29) 大隅国建久図田帳については、五味克夫「大隅国建久図田帳小考-諸本の校合と田数の計算について-」(『日本歴史』142 昭和35年)を参照。以下図田帳の引用は、この論文に拠る。
- (30) 五味文彦「女性所領と家」(女性史総合研究会編『日本女性史』(2)中世 東京大学出版会 昭和57年)
- (31) 藤原高平が菱刈一族である事は、五味克夫「大隅の御家人について」(下)(『日本歴史』131 昭和34年)、同「大隅国御家人菱刈・曾木氏について-曾木文書の紹介を中心に-」(『鹿児島大学史学科報告』13 昭和39年)、同「大隅国御家人菱刈・曾木氏再説」(安田元久先生退任記念論集刊行委員会編『中世日本の諸相』(下)吉川弘文館 平成元年)、拙稿「建部姓佐多氏系譜再考」等を参照。
- (32) 祢-283
- (33) 藤原重弘と重信との関係は、前述建部清忠解状断簡中の「重弘^{重信}」,「重信^{重弘}」の記載から、両者が兄弟である事が解る。この事実は、既に五味克夫氏の註31の諸論文で指摘されている。問題は藤原重弘・重信兄弟と菱刈重俊との関係である。五味克夫は、註31の諸論文で藤原重信と菱刈重俊の活動時期が一致するという事で、重信と重俊とを同一人物であると推定された。この事については、今後再検討する必要があると思う。
- (34) 鎌倉幕府が建部清重を祢寝院南俣地頭職に補任した建仁三年七月三日付関東下文案(祢-1)は、文言に問題があり信頼する事ができない。しかし同年八月 日付大隅国司庁宣(祢-3)や同年十月三日付大隅国留守所下文(祢-4)、同年八月 日付宇佐弥勒寺寺家公文所下文(祢-280)や同年十月三日付正宮公文所下文(祢-268)等の文書の存在を考えれば、建仁三年に建部清重が祢寝院南俣の領有権を回復した事を否定する事も問題だと思う。故に現段階においては、建部清重が祢寝院南俣の領有権を回復した時期を仮に建仁三年としておく。但しこの問題については、今後の検討課題である。
- (35) 祢-3
- (36) 拙稿「建部姓佐多氏系譜再考」
- (37) 飯沼賢司「人名小考-中世の身分・イエ・社会をめぐる-」(竹内理三先生喜寿記念論文集刊行会編『荘園制と中世社会』東京堂出版 昭和59年)
- (38) 建部氏が親助期に、大宰府・国衙に年貢を滞納していた事は、祢-638・639を参照。
- (39) 建部氏が頼清期に、平行道と祢寝院南俣の領有権を巡り相論している事については、祢-638・639・640を参照。
- (40) 大隅国建久図田帳の島津荘一円荘・寄郡の項の関係分を抄出する。

「嶋津庄 殿下御領 地頭衛門兵衛尉

新立庄七百五十丁

深河院百五十余丁

財部院百余丁

謀反人故有道有平子孫干今知行之、

多禰嶋五百余丁

件三箇所保延年中以後新庄、不随国務也、

寄郡七百十五丁八段三丈

(中略)

禰寝北俣四十丁五段四丈

図田帳によれば、大隅国内の島津荘一円領は十二世紀前期の保延年中以後立荘された事が解る。一般的に一円領の方が半不輪領よりも早く成立したと想定される事を踏まえると(工藤敬一『九州庄園の研究』 塙書房 昭和44年)、大隅国内における中世に繋がる島津荘寄郡の形成時期は、竹内理三氏が「薩摩の荘園-寄郡について-」(『史淵』75 昭和33年)で指摘された様に、十二世紀前期の保延期以降であると考えられる。祢寝院北俣が島津荘寄郡化した時期も保延期頃と推測され建部清貞が祢寝院司に在職している時期とは重なる可能性が大きい。祢寝院北俣の島津荘寄郡化の要因として、北俣の在地領主藤原氏の祢寝院司建部清貞との競合・対立関係が考えられるのではないかと思う。

- (41) 江戸中期における祢寝氏の文書整理の経緯及び祢寝氏の平姓を冒す過程については、近藤成一「祢寝文書の伝来について」(昭和59年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書『西日本における中世社会と宗教との総合的研究』昭和60年)を参照。祢寝氏が平姓を冒す経緯とその過程については、近藤氏の研究を基礎として更に深める必要がある。